

第三回「防災スペシャリスト養成」企画検討会 議事概要

1. 検討会の概要

日 時：平成 26 年 10 月 31 日（金）10:00～12:00

場 所：中央合同庁舎 8 号館 5 階 共用会議室 A

出席者：林座長、岩田委員、牛山委員、大原委員、国崎委員、黒田委員、重川委員、丸谷委員、市川教授、中林教授

2. 議事概要

議題ごとに各委員による意見交換を行った。主な意見等は次のとおり。

(1) 議題 1 平成 26 年度「防災スペシャリスト養成研修」実施報告

- カリキュラムの改善にあたり、評価の高かった講座を重視する考え方ではなく、必要性の高いテーマを重視すべき。評点は、講師の説明方法や教材等の改善の参考とするのがよい。
- 講師への依頼時に、講義で教えるべき内容など、講師の準備上で参考となる情報を詳しく伝えるべき。受講生の参加状況も、事前に情報提供すべき。
- 講師への事前説明が全般に不足している。本研修の意義や内容、講座が評価されることなど伝えるべき。講師をパートナーと考えて行うのがよい。
- 地方別研修では、講師の確保が難しい点も今後の課題として捉えておくべき。
- 将来の方向性として、必要な講座とその内容に対する講師の候補者リストを作成するとよい。
- 講義概要や講師提供の資料の取り扱いなど講師に事前に十分説明し、納得いただき引き受けてもらうこと。文書化するなど手続きを改善すべき。
- 防災の実務に携わっている受講生にとって、一方的な講義ばかりではなく、講師との質疑応答、意見交換等やり取りの時間をとることも重要である。
- 講座には、体系的に整理されている知識の説明を中心に進めるものと、講師とのやり取りを通じて進めるものとの 2 種類がある。講義の性格を活かし、効果の高い研修になるようコース設計するのがよい。
- 受講者間の交流を促すための懇親会を推奨するのであれば、受講生に事前連絡をしておくべき。交流の形式として、ランチミーティングや講座間にカフェタイムを確保するなどの工夫もあるのではないか。

- 地方別研修のカリキュラムにある演習において、検討課題の内容が古いものがあつた。演習内容の品質も確保すべき。
- コースごとにコーディネーターを置き、2 日間にわたるコース全体の設計と運営管理を担ってもらってはどうか。
- コーディネーターの配置により、コースの流れがスムーズになり、講座間のつながりが作れ、各講座の位置づけが明確になる。また現コースのうち、講座の入れ替えが必要な箇所も明らかになる。
- コースのテーマが軸を「人」や「まち」というようにさらに鮮明にしていくと、よりコースの企画もやりやすくなる。
- コーディネーターの役割を明示して、依頼文書や謝金なども用意するとよい。また、コーディネーターの人材養成も必要。
- コーディネーターは研究者でなく、実務家や内閣府が行なってもよい。
- 応募者の多かったコースは、回数や受講者数を増やすことを検討するとよい。
- 今年度は、現コースの設定状況を踏まえ、各講座で教えるべきことの内容を体系的に整理するのが重要。コースの種類や運営面の改善は、段階的におこなえばよい。
- ご意見を踏まえ、講座の入れ替えを行うなどして改善を図っていく。また、各コースのコーディネーターの選定も考慮しつつ、講師の依頼を進めていく。なお、講師への事前連絡をより丁寧を実施していく。

(2) 「標準テキスト(案)」の検討

- 標準化テキストの位置づけは、林座長資料にある「永続記憶」に該当する。今年度は、知識ベースのコンテンツを標準テキストという形で整理している。
- 内容について細かい点は変更の余地があるが、思想や意見が入らない知識ベースの資料として価値がある。標準テキストの作成方向はこれでよい。
- 目次の構成(章だての順番・粒度)の考え方の共通化を図る必要がある。防災基本計画に沿って、その内容も含め記載することを基本としていくのでよい。
- 構成は、まず概要を示し、次に関係する法律・制度、計画を示し、さらに事例紹介をしつつ、現状の課題・まとめという流れがよい。全コースの章立て、項目・並びなどをそろえることで、読者は読みやすく、抜け漏れも防げる。事業継続推進機構のテキストを参考にしてほしい。
- 内容が重複しているなど未整理の部分については、精査をすすめること。
- 本年度は、網羅することを重視し、品質向上は来年度の課題とするのがよい。

- 時間とともに流動する情報の取り扱いについては、その更新費用や時間を考慮する必要がある。
- テキストの継続的な更新のために、組織体制の整備は不可欠で極めて重要。
- 現テキストはマルチハザードを対象として整理されているが、市町村職員からすれば、自分が関係する個別災害についての情報が知りたい。
- 各種危機への対策として、共通性の高い事項と、避難のようにハザードの種類により変わる事項とを区別できる工夫がされていると使い勝手がよい。
- URL は変化するので、出典は、URL に加え資料名称も記載すること。
- 章の目次項目が少ないものほど、研修での実施が必要であるものと捉えることもできる。
- コース設計と同様に、各テキストにコーディネーターを設けるなどして、品質を確保するための体制を整えてもよいのではないか。

(3) e ラーニング利用イメージと学習内容の範囲等の検討

- e-ラーニングの活用の方向についてはさまざま考えられるが、まずは、有明研修をより効果的なものとするための e-ラーニングシステム開発を優先すべきではないか。
- 開発・維持管理として確保できる予算等に応じ、検討の奥行が変わる。
- e ラーニングの利点を活かし、過去の災害経験者へのインタビュー等を盛り込むなど映像や動画を活用により、より分かりやすく伝えられるとよい。
- 防災基礎は e ラーニングで代用するなど、標準テキストから切り離することも考えられる。また、事前学習や宿題の素材（インタビュー映像など）の提供により、研修と組み合わせて活用することも考えられる。
- テキストで伝えきれない災害のリアリティを習得する機会として活用できる。
- LMS を地方公共団体が利用できるようにすることは、組織の人材育成としてたいへん有効である。
- 有明の丘研修の講義ビデオを作成し提供するなども方法の一つ。第 2 期の研修の一部でためしてみてもどうか。容易に実現できる方法を検討してほしい。
- e ラーニングでは、10 分程度での解説が必要。テキストの概要や主旨などの説明など、学習の促進につながる e ラーニングにすれば、費用も過剰にかからず、研修のサポートもできるのではないか。

- eラーニングの教材は、「知識ベース」と「講師の講義アーカイブ」と「クイズ」の3つの組み合わせになるのではないか。なお、知識ベースには、様々な映像も加えて、活用1を図るとよい。

以上